

【1面から】 教職員がリレー

トークを行い、①軍事予算の増額よりも教育予算を確保し、少人数学級の推進や教職員の増員、残業代支給、特別支援教育の充実を求める。②定額働かせ放題の根拠となっている給特法を改正し、実際に働いた時間外には長時間労働の歯止めとなる残業代支給のしくみの整備が必要。③教職員不足により産休に入る職員の代替者が確保されず、周りの職員に負担が増えている。④中央審議会や教育委員会等が設ける審議会に、教職員組合の代表の参加を求める。など学校をめぐる厳しい現状で改善の要求を道ゆく人に訴えました。

宣伝行動参加者は、全教と全労連作成の春闘チラシ二種類を折り込んだポケットティッシュ約



【2面から】 背景には、やはりノーベル平和賞の報道が大きく影響していると感じました。さらに署名を広げ、「核兵器禁止条約への参加する日本政府にすること」と、「一日も早い核廃絶」を目指してがんばります。

「戒厳令」と緊急事態条項① 9条の会・かがわ事務局

昨年十二月三日夜韓国の尹錫悦(ユンソンニョル)大統領が突如「非常戒厳」を宣言し、戒厳司令部は「政党の活動、政治的結社、集会、デモなど一切の政治活動の禁止」「すべての報道と出版は戒厳司令部の統制を受ける」などの布告を発しました。大統領は、国会で過半数を握り、政権の方針と対立する法案提出や採決の強行などを繰り返す野党を「内乱を画策する明白な反国家行為だ」と批判し、「自由憲政秩序を守るため」非常戒厳を宣言(せん)したとしました。戦争や内乱、大災害などの「非常時」に際し、憲法や法律の一

部を停止し政府・軍に立法権や司法権を含む強大な権限を与えることのような宣言を「戒厳令」と呼び、戦前の日本では明治憲法に規定され、関東大震災や二・二六事件などの際に発令されました。戒厳令下では集会・結社、言論・出版など国民の権利が制限・停止され、軍や警察は令状なしに国民を逮捕・拘留できることとなります。この発令の根拠となるのが、他国の憲法に見られる「緊急事態条項」です。

韓国の憲法は軍事政権下で光州事件(一九八〇)などを起こした強権的・独裁的な内容のものから、一九八七

年の民主化デモの成功により現在の憲法に改定された。緊急事態に必要と認められる場合、政府は「法律の効力を有する命令」を発する権限を与え、第77条で大統領は「戦時・事変又はこれに準ずる国家非常事態において軍事上の必要に応じ、又は公共の安寧秩序を維持する必要があるとき」に「戒厳を宣布」することができるとい

うも



「戒厳を宣布」すること、言っていないのでしょうか?

西讃地区委員会がSNS学習会

日本共産党西讃地区委員会は12月15日、丸亀市で候補者や支援者らを対象に、「初心者でもSNSを自分のペースで日常的・効果的

に活用する」ためのSNS学習会を開きました。講師は県党のSNS対策委員会の落合絢(ひろ)さん。党中央宣伝局のSNS

ページの資料も使い、「今まで繋がりのなかった若年層や無党派層など、どういう人に働きかけるかを考えて各SNSを使い分けることが重要で」と強調しました。

【日本共産党4中総・「SNS」に強い党の発展形の補足】



「非常戒厳」は韓国では一九八〇年以降の発令で、現行憲法となつて以降初めてのことで、現代の民主国家において耳を疑うような出来事でしたが、果たしてこれは日本では起こりえない「対岸の火事」と言っているのでしょうか?

【4面へ】

成人式で署名行動

新婦人小豆支部

新婦人小豆支部では毎年の成人式会場の署名行動をしました。今年も、小豆島町の「はた

ちのこい」会場のサン・オリブで1月12日に「日本政府に核兵器禁止条約の署名・批准を求

める」署名を集め、4名が参加しました。被団協がノーベル平和賞を受賞したことも紹介しながら、新成人だけでなく先生や保護者にも声をかけ、約40分間の行動で60筆の署名が集ま



りました。これまでになく反応が良く、多くの人が署名をしてくださいました【3面に】

3) 被爆者の証言活動で忘れられない人たち

前回紹介したオーストリアのアレクサンダー・クメントさんは、「2014年に広島と長崎を訪れたとき、被爆者の方々が原爆投下の当時に自分がいた場所に私を連れて行ってくれました。幼い頃に被爆した彼らが高齢者になった今でも震えながら話す姿、もしくはこの経験をほとんど話すことができない姿を見て、気持ち

「日本被団協」がノーベル平和賞を受賞 香川の一会員として今思うこと③ 藤井 明

この言葉を聞いて私が思い出すのはやはり、谷口稜曄(すみてる)さんと山口仙二さんです。

長崎で被爆し、背中一面に重度の火傷を負った谷口さんが、うつぶせのまま身動き一つ出来ずに治療を受ける自分の姿が映像に残されていることを知ったのは、実に40歳を過ぎてのことだったそうです。その谷口さんが、「私の背中は見世物ではない、誰がこれをやったのか知ってほしい」と、背中一面の火傷に呻く被爆直後の自らの写真を掲げながら原爆の残酷さを訴える様子は鮮烈でした。

山口仙二さんも14歳の時、長崎で被爆された方です。忘れられないのは、昭和57年(1982年)、ニューヨークで開かれた国連軍縮特別総会での山口さんの演説です。幾度となく、「ノーモア・ヒロシマ、ノーモア・ナガサキ、ノーモア・ヒバクシャ」と身振り手振りを交えて壇上で声を張り上げる山口さんの演説は、世界中の人々の心を動かししました。

もちろん証言活動を続けてこられたのはこのお二人だけではありません。ここ香

川でも、昨年、RNCやNHKで紹介された三木町のA・Nさん、そして高松在住のY・Nさんなど90歳を超えた被爆者の方々が語り部として体験を語り継いでこられました。こうした方々の語る核戦争の具体的な姿こそが、核兵器をめぐる問題を安全保障上の交渉事から「非人道性に光をあてた議論」、いわば生きた人間の血が通った議論へと発展させたことは間違いのないと思います。そして今、二世である私達がそれらをどう引き継いで行くか、頭を悩ませているところです。

